

家庭教育支援編

学校支援コーディネーター 布 昭子

小平市の取り組み

- 平成13年度に「21☆小平の教育改革アクションプラン」を策定し、学校、家庭、地域が一丸となって教育改革を進めてきました。
- 平成14年度から、国に先立ち、「学校支援地域本部事業」と同じ内容の事業である東京都補助事業「小平地域教育サポート・ネット事業」に取り組み、学校支援ボランティアの学校への導入と、学校と地域を結ぶコーディネーターの養成を図ってきました。
- 現在学校支援コーディネーターは、市内の小・中学校27全校に設置されています。



小平第二中学校区域では

地域は大きな教室

という視点で取り組み始めました。

子どもたちにとって
学校生活を楽しく過ごすため
には

- * 勉強が分かること
- * 友達がいること
- * 自分の役割があること

これが大切です。

支援にかかわって

・平成14年当時生徒数約660人の学校で、各クラス2～3人前後の学校を休みがちな生徒の存在

・子どもたちが抱える課題の理解

・学校が抱える課題の複雑化の背景への理解

いじめ・不登校・学級崩壊・規範意識の低下
安全防災・保護者への対応・経済的な理由

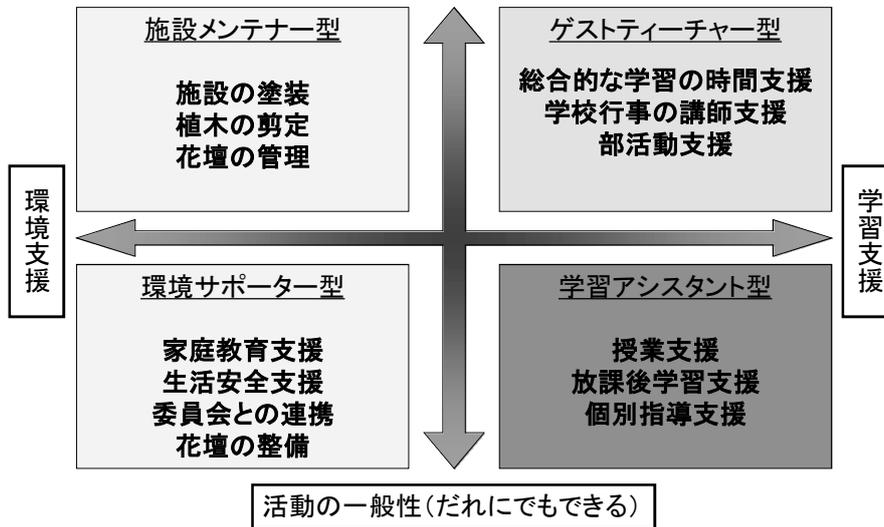
具体的な研修の実施

学校支援ボランティア入門講座

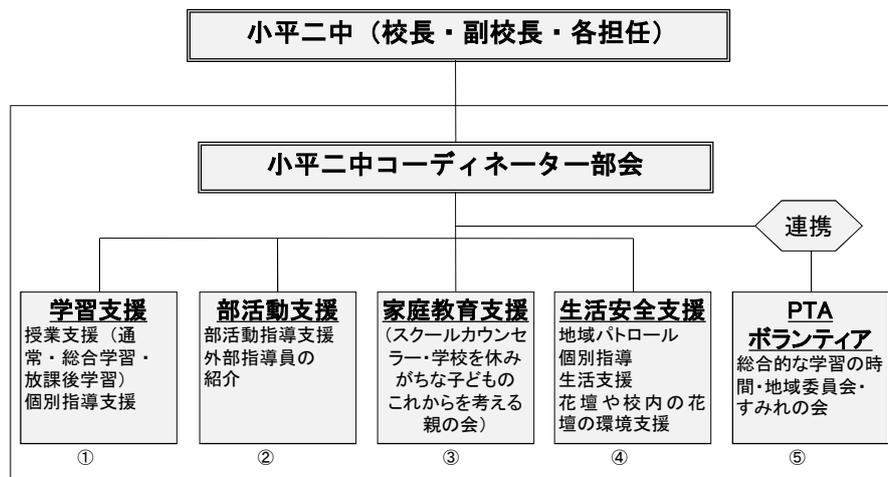
学校支援ボランティアスキルアップ講座

小平第二中学校の活動

活動の特殊性(専門的知識・技術が必要)



小平二中 学校支援ボランティア体制



学校を休みがちな子どもの保護者の課題と支援の資源

H14年当時の課題

家庭が子どもにとって安心できる場所でありたいと願うが・・・

- ・家族の中で 学校の中で 地域の中での孤立感
- ・親が周囲の共感が得られない。
- ・最新の進路情報が入りにくい。
- ・相談したいときに限って先生が忙しそう・・・(遠慮がちな親)

支援のための資源

- ・スクールカウンセラーの存在
- ・先輩保護者の存在
- ・養護教諭の存在
- ・地域教育サポートネット事業の展開
子どものために親へ支援 親にも苦しみや課題がある。
何かシステムが作れないだろうか。

保護者にとって

- * 不安に寄り添う場があること
- * 共感し合う場があること
- * 情報を得ることができる

必要です。

「学校を休みがちな子のこれからについて考える親の会」の開催 H16～

スクールカウンセラーのアドバイスを受けながら、先輩保護者(子どもがかつて不登校で、中学校卒業後、チャレンジスクールや定時制高校に進学)の体験談を聞いたり、悩みや不安を共感的に聞いてもらったりすることで、支え合う活動を各学期1回のペースで開催。

「個別指導」支援・・・H16スタート

不登校の生徒に対する別室学習指導を、学校と保護者と相談の上、行っています。



ぷらっと親の会の様子

学校を休みがちな子のこれからについて考える親の会 今年で10年！

- ・子どもへの対応だけではなく、そばにいる親への支援が必要
- ・押し付けにしない支援 かかわる側の自己満足にしない。
個々の親や子どものニーズを確認し合う。
- ・親の不安、弱み、愚痴を、ここで吐き出せる。少し元気が出る。
保護者間、夫婦間、兄弟間で、板挟みになり、もやもやして整理できない感情を抱えた親が落ち着く場所。日ごろ、家などでの子どもの状態をどのように受け止めればいいのか、解決策とまでは行かなくても、体験談を聞くことを通して、子どもを支える力を得ることができる。
- ・進路についての具体的な情報を得ることができる。
- ・中学校で開催することで、学校に関わりのある子どもが中心になる。
中学から高校への期間に特化するメリット(小学校にとっても)
- ・専門職のSCと一緒にいることで、この場への信頼性が高まる。

現在の学校(小平二中)の主な取り組み 支援者の連携がうまくいっている。

具体的にどうするのか → こういうこともできる

- ・学校経営方針「寄り添う指導」(見捨てない指導)
- ・小グループ学習をすべての時間で実施 → 取り残される子どもがいない。
(学び合い学習でみんなが授業に参加する)
- ・教員による校内の見回り(休み時間も)
- ・ユニバーサルデザインの考え方を取り入れた教室や授業
- ・週1回の校内支援委員会(管理職、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、各学年教育相談担当、SC、SSW、養護教諭、特別支援学級担当)で、情報の共有化、支援方法の検討、外部機関との連携を図る。
- ・SCとSSWの連携
- ・「ぷらっと親の会」とふれあいルーム(ボランティアの部屋)の活用
親の不安を軽減し、精神的安定に貢献

現在の小平市の主な取り組み

何をどうしたらいいのか

やるべきことを丁寧に取り組む

問題解決的アプローチ と 予防的アプローチ の実践

- ・適応指導室(あゆみ教室)の有効な活用
- ・SSWの中学校全校配置 → 家庭訪問等を丁寧に行っている。
- ・長期欠席児童・生徒支援シートの活用(学期ごとの確認) →
長欠支援シートに基づいたあゆみ教室指導員と指導主事による学校訪問
- ・小中連携 → 中学へのスムーズな移行のために、早い段階から小中の連携に力を入れている。

今後の課題

人それぞれ生活や精神状況はちがう

- ・SCやSSWのさらなる養成と研修
- ・地域の支援者(学習支援ボランティアなど)への理解と合同研修
- ・学校を休みがちの子どもやその親が抱える課題や願いに対する
さらなる具体的な対応
- ・長期的な体制
- ・情報の共有
- ・保護者の生活支援(福祉機関との連携)
- ・学校と医療機関との連携
(小児外来 思春期外来 小児精神専門医との連携)
新たな不登校の状態を生み出さない取組

他人ごとにしない社会

ひとりひとりの心の中にあるバケツ
自分はあるのままでいいという水
底が抜けているかもしれないバケツ
穴があいているかもしれない
そのバケツに、水がわき出るように
そのバケツに、水がたまるように
そして、そのバケツから水があふれ出るように
おたがいに水を注ぎ、励まし支え合う社会
自立できる社会
あたたかい言葉と笑顔

ありがとうございました。 コーディネーター 布 昭子